

# 漢文 李白『静夜思』定期テスト対策問題 | 形式・押韻・対句・現代語訳の頻出設問と解答 解答・解説

---

問1 五言絶句（ごごんぜっく）。

問2 静かな夜に、(故郷を) 思うこと（静かな夜のもの思い）。

解説…「静夜」＝静かな夜、「思」＝思うこと・もの思い。題名がそのまま、この詩の主題（望郷）を表している。

問3 読み…しょう（しゃう）。意味…寝台（しんだい）・ねどこ。ベッド。腰かけ（こしかけ）とする説もある。

解説…「牀（牀）」は寝るための台のこと。作者が夜、寝床のあたりで月光を見ている場面である。

問4 寝床のあたりに（さしこむ）月の光を見る。（ベッドの前に月の光がさしこんでいるのを見る。）

問5 (1) 漢文は原則として上から下へ「牀→前→看→月→光」と読みたいが、「看（みる）」は「月光（を）」という目的語のあとに読む（＝下から返って読む）必要がある。「月光」は二字なので、レ点ではなく二字以上をへだてて返る「二・一点」を用いる。そのため「光」に一点、「看」に二点がつく。

(2) 読む順番…牀(1) 前(2) 月(3) 光(4) 看(5) ＝「牀前 月光を見る」。

（「看=月光-」だけの番号なら、看③・月①・光②となる。）

問6 (1) (その白さに) これは地面におりた霜ではないかと思うほどだ。（うたがうことには、これは地上の霜だろうか、と。）

(2) (地上の) 霜。

解説…「疑ふらくは〜かと」は「ひょっとして〜ではないかと思う」の意。寝床にさしこむ月光のあまりの白さを、地面におりた霜と見まちがえた、ということ。

問7 「挙<sub>レ</sub>頭」＝頭（顔）を上げる動作。「低<sub>レ</sub>頭」＝頭（顔）を下げる・うなだれる動作。

解説…月を見ようと顔を上げ（挙頭）、やがて故郷を思つてうつむく（低頭）という、二つの正反対の動作が対になっている。

問8 月を「望む（ながめる）」という外の景色への動作から、故郷を「思ふ」という心の中の動作へと移っている。明るい月をながめているうちに、その月が故郷でも見えているはずだと気づき、ふるさとへの思いがこみあげてうつむいてしまった、という心の動き。

解説…「望（外＝月へ向かう目）」から「思（内＝心の中の故郷へ向かう）」へという対応が、望郷の情がしだいに深まるようすを表している。

問9 頭（顔）を上げて、山の上に出ている月をながめる。（顔を上げて、山ぎわの月を遠くにながめやる。）

問10 ア。

解説…レ点は、すぐ上の一字を、下の字を読んだあとに返って読むことを表す。「低<sub>レ</sub>頭」は「頭（を）」を先に読み、次に「低（る）」と返って読むので、「頭を低れて」となる。イは「二・一点（一二点）」、ウは置き字などの説明。

問11 頭（顔）を下げて（うなだれて）、故郷のことを思う。

問12 (1) 五字。(2) 四句。(3) 絶句。

解説…一句が五字で、全部で四句の詩を「五言絶句」という。八句あれば「律詩」。一句が七字なら「七言（しちごん）」とよぶので、「七言絶句」「七言律詩」と区別する。

問13 光・霜・郷（の三字）。

解説…それぞれ第一句末「光」、第二句末「霜」、第四句末「郷」で、音読みすると「コウ・ソウ・キョウ」となり、響き（韻）がそろっている。

問14 (1) 第一句・第二句・第四句。

(2) 五言絶句では、原則として第二句と第四句の末で韻をふむ。

(3) 第一句。

解説…五言詩では本来、偶数句（第二・第四句）末で押韻するのがきまり。この詩は、それに加えて第一句末「光」でも韻をふんでおり、ふつうより一か所多い。

※高校では「第一・二・四句で押韻」とおさえれば十分です。

問15 (1) 低（頭を低る）。(2) 思（思ふ）。(3) 故郷。

解説…第三句「上挙下頭 望上山月」下と第四句「下低上頭 思下故郷」上は、

- ・ 挙（あげる）⇔低（さげる・たれる）
- ・ 頭⇔頭
- ・ 望（ながめる）⇔思（思う）
- ・ 山月⇔故郷

というように、語の組み立てと意味がきれいに対応する対句になっている。

問16 望郷（ぼうきょう）の念。（「郷愁（きょうしゅう）」「故郷を思う心」なども可。）

解説…遠く離れた故郷を恋しく思う気持ちが、この詩の中心の主題である。

問17 静かな夜、旅先（ふるさとを離れた地）で、寝床のあたりにさしこむ月の光を見て、ねむれずに故郷を思っている情景。

解説…夜・月・寝床という設定から、ひとり旅の宿などで、月を見ながら故郷をしのんでいる場面だと読み取れる。

問18 前半（第一・二句）は、寝床にさしこむ月光のうつくしい情景（目に見える風景）をえがき、後半（第三・四句）は、その月をながめるうちにわき上がった故郷を思う心情へと移っている。

解説…「景（風景）」から「情（心情）」へと展開する構成になっている。

問19 (1) 詩仙（しせん）。(2) 杜甫（とほ）。(3) 唐（とう）。

解説…李白は自由でおおらかな作風から「詩仙」、杜甫はきびしくととのった作風から「詩聖」とよばれ、ともに盛唐（せいとう）を代表する大詩人。

**問20** (1) 明 (牀前明月光)。 (2) 明 (拳頭望明月)。

解説…この詩は版によって本文に異同があり、『唐詩三百首』などでは第一句を「牀前明月光」、第三句を「拳頭望明月」とする。日本の教科書では「看月光／望山月」とする形が広く用いられている。意味の上では「明月光」＝明るい月の光、「望明月」＝明るい月をながめる、となり、大きな違いはない。